

340-30
1200501398279

340
0



始



85-11

芝居百人一首



三石

小口 袋 海



340-30



芝居百人一首

大正
8. 4. 29
購求

古今四場居百人一首

古今四場居百人一首解題

本書は元祿六年五月の開板にして、鳥居清信が書くところ、稀代の珍本なり。現存するものにして予が知れるは、東京松廼舎文庫及び大阪雅俗文庫に蔵せらるゝ二部のみ、未だ他にあるを聞かず。思ふに清信がなほ師宣を模せし壯時の筆に成れるが如きも、豪放の氣全幅に満ちて、自から後世「鳥居風」と稱せらるゝ畫祖の筆致をほの見るを得べし。

本書は始め「古今四場居百人一首」と題し、が當時賤しき河原者を小倉の選に模するは憚多しとて改題を命ぜられ、「古今四場居色競」と改めて出板するや直ちに絶板を命ぜられて、印本は勿論、板木の全部を没收破棄せられたるもの。要するに一種の役者評判記にして、今に於てこれを思へば其絶板を命ぜられたる理由の殆んど解し難きものありと雖も、封建專政の制は蓋し止むを得ざりしなるべし。市川團十郎、森田勘彌、等名優一百の品隣に至りては、當時劇壇の面目躍如たるを見る。雖も、其筆者の何人なるかを知らず、惟ふに豫め後累を恐れて名を署せざりしものならんか。

大正三年四月

伊原青々園識

古今四場居名魁月

元亨利貞の四徳と始と終と運と成と

小群と春と夏と秋と冬と時と

乃四邊と四角と満ちて象と結と

曰庚と人象と寶馬の

海翰ありては

の田也六田神一相意の也

と外一田維也々田の程也

表一立役音戲由取若荒歌ハ、

代集先形事候と事一之戯也

と六須多強乃田列り登々多持園

増長店月の田入事等事高事ハの種也

處懺處至処有樂相の室室天

香傳音取事雲行事の田所の明神田

十八願の強地の物ハ室室事其形事候

法南自解其高の室室金液潤珠の田

輪金事也もも事下ハ事農一

田氏傳事藤橋の田也事青ハ

凌しやう平へい原げんの四し君子くんには結むす糸いと南なん為なり茶ちや
 嶽たけ東とう大だい真ま福ふく延えん曆りき園えんの四し箇くわん真まの
 室むろの四し切き灼しやく三さん回かい果くわいの四し向きやうの四し陰いん燭しやく恒へい天てん
 死しの四し魔ま麻ま五ご指し襪わく栗りき造ぞう腹ふくの四し殺ころ
 秋あき舍しゃ道だう乃なり四し也や高かう去そ別べつ割わりの四し夏げ
 飲いん食しき衣い服ふく湯たう茶ちや房ふ客かくの四し軍ぐん供く軍ぐん八はち

乃なり相あひ撲つの四し分ぶん之し法ぽう高かう生せい鬼き律りつの四し養やう
 時とき情じやう也や食しき場ばう乃なり四し秋きう也や香かう味み鴨あひの四し徹てつ光かう
 人にん毛もう音おん也や乃なり四し果くわい不ふ附ふ胎たい卵らん也や乃なり化くわ
 乃なり星せい象しやう馬ま車しや客かくの四し真ま寫しやの四し并へい麟りん也や
 乃なり行かう住じゆ坐ざ外がいの四し冥めい哉さい
 乃なり担たん云うん濟じ河かの四し乃なり物ぶつ也や

ついでに其の書の内容の如何なるか
いふ事にしておぼろげな事
仕の事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事

惟(ただ)古今の事(こと)は其(その)色(いろ)と競(ま)て
一(ひと)と云(い)ふ事(こと)の事(こと)の事(こと)を
其(その)事(こと)と云(い)ふ事(こと)の事(こと)
其(その)事(こと)と云(い)ふ事(こと)の事(こと)
其(その)事(こと)と云(い)ふ事(こと)の事(こと)
其(その)事(こと)と云(い)ふ事(こと)の事(こと)
其(その)事(こと)と云(い)ふ事(こと)の事(こと)

とけりて後回行する程第一等
智業の四自在なるを如行無事
脱勝進の四及程先一物も蜂菓
の四去の多食の撰と云ふ金延撃
鼓の四巻乃打鼓と云はるる四巻の
る侍交をなすも亦能く其の四巻の

男岸樹の燭海松蔭の四巻程
一と四の氣色をよみ出さば四
百四病の疾回の日の細の目か
ふと決一向狂史の云らふてま
ああらと悔は朝の脱去其指の
ありて尾とあるのありて

第一の巻は道と道徳の巻である

性悪軒

四流子序文

古今四場異百人一首

童戲堂

四流序文

歌書あり書集

高麗亭

四流序文

千時癸酉正月日

色韻破

回場長山店の百人一こひやくにん苦集道感くじつだうかんの
回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の
乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の
乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の
乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の

縁洽境中えんじやくきやうちゆうの回員かいぎんと劫河昆珠きやくがわこんしゆ産う産ぶ
何里なんりの回員かいぎん論ろんと弁べん生せい老らう病びやう死しの回員かいぎん
と聲せい色しき地ち水すい火か風ふうの回員かいぎん乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の
乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の
乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の
乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の回場かいじやう止とどゆす法ぽう乃の

若の思断をり田の思と修を報
御美の思断をり田の思と修を報
乃思断と切後修断の思行を修
思修長の思断を起し思断を思
修断の思断を解脱思断を思
修と合し思断を修断を思断

人々思断比思の思断と修を報
若長修云時の思断を思断を報
の思断と洗作止修断の思断を思
思断を思断の思断と修を報
思断を思断の思断と修を報
思断を思断の思断と修を報

古風のしほひに金張珠玉の窓の裏と海の内
 へ繞る風の芝居の振袖の東夷南雲
 西戒小秋の白羽の衣ひとと唐景賊の司
 の四雲と屏をへ海橋のまゝのあな
 鳥の勢とまゝと風の陣を合を張る
 松作庵
 四友麻生

梓澤のしほひに金張珠玉の窓の裏と海の内
 へ繞る風の芝居の振袖の東夷南雲
 西戒小秋の白羽の衣ひとと唐景賊の司
 の四雲と屏をへ海橋のまゝのあな
 鳥の勢とまゝと風の陣を合を張る



松作庵
 中村勘三郎



はやく...
...
...
...
...



日
...
...
...
...
...



けつりつてゐるさき
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか



けつりつてゐるさき
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか
 のうらさきしづか



神楽の舞は、
 昔より伝へられ、
 今もなお、
 人々の心を
 引き寄せ、
 喜びをもたらす。

神楽の舞
 白洲

 日村七三郎

はな
 びり
 け
 ん



昔から伝へられ、
 今もなお、
 人々の心を
 引き寄せ、
 喜びをもたらす。

神楽の舞
 玉川

 日村七三郎

はな
 びり



けいけい けいけい けいけい
 ままら けいけい けいけい
 曲し けいけい けいけい
 月 けいけい けいけい
 ね けいけい けいけい
 よ けいけい けいけい
 の けいけい けいけい
 る けいけい けいけい
 の けいけい けいけい
 や けいけい けいけい
 声 けいけい けいけい
 けいけい けいけい けいけい

新 威 風 凛 々
 世 小 牛 節
 人 々 々 々 々
 女 々 々 々 々

けいけい けいけい けいけい
 ままら けいけい けいけい
 曲し けいけい けいけい
 月 けいけい けいけい
 ね けいけい けいけい
 よ けいけい けいけい
 の けいけい けいけい
 る けいけい けいけい
 の けいけい けいけい
 や けいけい けいけい
 声 けいけい けいけい
 けいけい けいけい けいけい

新 威 風 凛 々
 世 小 牛 節
 人 々 々 々 々
 女 々 々 々 々

玉川子と申すは
昔は平家朝臣の
孫とて、幼少に
父母を失ひ、母
の遺言に依りて
修行を志すに
出づ。其の志を
守りて、佛法に
専念す。其の
徳に感ずるに
神異あり。其の
事蹟を記すに
玉川子と云ふ。



玉川子

大和守

玉川子

玉川子

玉川子と申すは
昔は平家朝臣の
孫とて、幼少に
父母を失ひ、母
の遺言に依りて
修行を志すに
出づ。其の志を
守りて、佛法に
専念す。其の
徳に感ずるに
神異あり。其の
事蹟を記すに
玉川子と云ふ。



玉川子

大和守

玉川子

玉川子

いひはれりてしるしを
 まはさるるまじき
 こころをわづらひて
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき

美の
 花の
 山村吉房


Decorative floral border at the bottom.

いひはれりてしるしを
 まはさるるまじき
 こころをわづらひて
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき
 むすぶるるまじき

美の
 花の
 山村吉房


Decorative diamond-patterned border at the bottom.

江戸の町を歩くと
 いろいろな物売りが
 見られる。その一つが
 扇の物売りだ。扇は
 夏の必需品で、種類
 も多い。この扇は、
 木製で、軽くて、涼
 しい。また、柄も美
 しい。扇の物売りの
 声は、町を賑やかに
 する。扇の物売りの
 姿は、江戸の町を歩
 く人々の目を楽しませ
 る。扇の物売りの声は、
 江戸の町の風景の一部
 だ。扇の物売りの姿は、
 江戸の町の風景の一部
 だ。

扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り

扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り

江戸の町を歩くと
 いろいろな物売りが
 見られる。その一つが
 扇の物売りだ。扇は
 夏の必需品で、種類
 も多い。この扇は、
 木製で、軽くて、涼
 しい。また、柄も美
 しい。扇の物売りの
 声は、町を賑やかに
 する。扇の物売りの
 姿は、江戸の町を歩
 く人々の目を楽しませ
 る。扇の物売りの声は、
 江戸の町の風景の一部
 だ。扇の物売りの姿は、
 江戸の町の風景の一部
 だ。

扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り

扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り
 扇の物売り

Handwritten text in a columnar format, likely a preface or introductory notes. The text is dense and written in a cursive style.



Decorative border at the bottom of the page, consisting of stylized geometric patterns.

Handwritten text in a columnar format, likely a preface or introductory notes. The text is dense and written in a cursive style.



Decorative border at the bottom of the page, consisting of stylized geometric patterns.

此の巻は、あつたての巻
 である。この巻には、
 いろいろな名物があ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ



この巻は、あつたての巻
 である。この巻には、
 いろいろな名物があ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ
 り、その名物を、こ
 の巻のうちに、いれ



賢者の言を聞き入
 りて其の言を
 奉行すべし
 道人の言を聞き入
 りて其の言を
 奉行すべし
 賢者の言を聞き入
 りて其の言を
 奉行すべし



賢者の言を聞き入
 りて其の言を
 奉行すべし
 道人の言を聞き入
 りて其の言を
 奉行すべし



上は... 下は... 中は...
 左は... 右は... 中央は...
 上段の文字は縦書きで、内容は詳細な説明文や詩文の断片と思われる。



上段の文字は縦書きで、内容は詳細な説明文や詩文の断片と思われる。



ねくもての袋
 中へ入るやうに
 春今もけつう
 長久の世に
 後の世に
 三秋の月人
 妙全一と
 ちてあふ
 世に
 こと
 ま
 る
 ず
 ら



ねくもての袋
 中へ入るやうに
 春今もけつう
 長久の世に
 後の世に
 三秋の月人
 妙全一と
 ちてあふ
 世に
 こと
 ま
 る
 ず
 ら



いづれか...
...
...

松島
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの



あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

いづれか...
...
...

あまの
あまの
あまの
あまの
あまの



あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

此の酒は人の心を清く
 するに最も宜しき物なり
 其の味は甘く香気あり
 且つ消化に宜しき故に
 老幼皆宜しき酒なり
 此の酒は人の心を清く
 するに最も宜しき物なり
 其の味は甘く香気あり
 且つ消化に宜しき故に
 老幼皆宜しき酒なり

色
 味
 香気
 消化
 老幼
 皆宜



此の酒は人の心を清く
 するに最も宜しき物なり
 其の味は甘く香気あり
 且つ消化に宜しき故に
 老幼皆宜しき酒なり



此の酒は人の心を清く
 するに最も宜しき物なり
 其の味は甘く香気あり
 且つ消化に宜しき故に
 老幼皆宜しき酒なり

味
 香気
 消化
 老幼
 皆宜

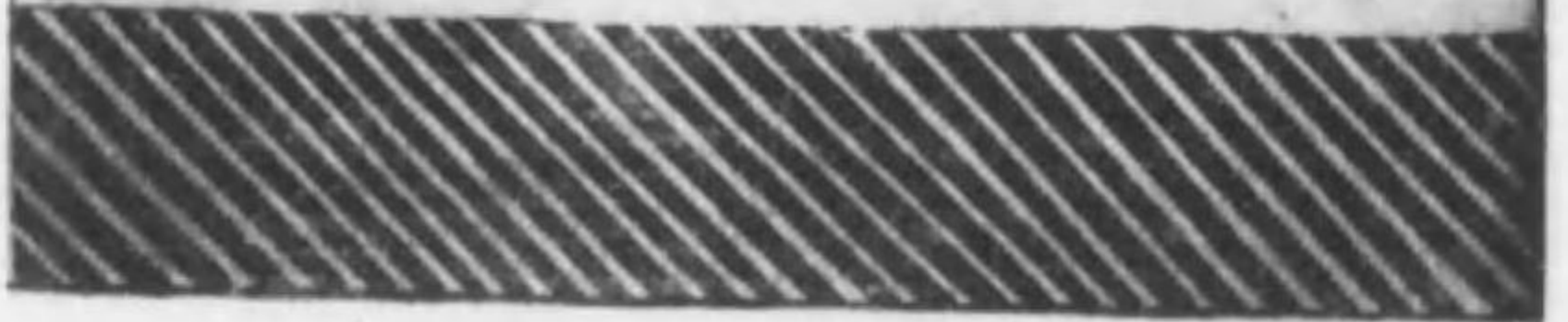


此の酒は人の心を清く
 するに最も宜しき物なり
 其の味は甘く香気あり
 且つ消化に宜しき故に
 老幼皆宜しき酒なり



虫 土
 土 虫

はつしやう... (Vertical column of small text)



はつしやう... (Vertical column of small text)



此の巻は、
 昔の事、
 今も昔も、
 変わらぬ、
 心持で、
 生きて、
 行く、
 べき、
 事、
 あり、
 けり、
 云々



此の巻は、
 昔の事、
 今も昔も、
 変わらぬ、
 心持で、
 生きて、
 行く、
 べき、
 事、
 あり、
 けり、
 云々



此の歌は、
 昔の歌に
 見ゆれば
 心も
 悲し
 なる
 事
 多
 し
 故
 に
 今
 の
 歌
 も
 昔
 の
 歌
 の
 如
 き
 事
 多
 し
 故
 に
 今
 の
 歌
 も
 昔
 の
 歌
 の
 如
 き
 事
 多
 し
 故
 に
 今
 の
 歌
 も
 昔
 の
 歌
 の
 如
 き
 事
 多
 し

新
 玉
 の
 花
 散
 り
 見
 ゆ
 ば
 心
 も
 悲
 し
 なる
 事
 多
 し

新
 玉
 の
 花
 散
 り
 見
 ゆ
 ば
 心
 も
 悲
 し
 なる
 事
 多
 し

此の歌は、
 昔の歌に
 見ゆれば
 心も
 悲し
 なる
 事
 多
 し
 故
 に
 今
 の
 歌
 も
 昔
 の
 歌
 の
 如
 き
 事
 多
 し
 故
 に
 今
 の
 歌
 も
 昔
 の
 歌
 の
 如
 き
 事
 多
 し

新
 玉
 の
 花
 散
 り
 見
 ゆ
 ば
 心
 も
 悲
 し
 なる
 事
 多
 し

新
 玉
 の
 花
 散
 り
 見
 ゆ
 ば
 心
 も
 悲
 し
 なる
 事
 多
 し

此の世に... (Vertical text at the top of the page)

雲
 回
 市川辰助



新
 未
 辰助

此の世に... (Vertical text at the top of the page)

丹
 舟
 舟
 舟



舟
 舟
 舟

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

けいのかみ
 一、...
 二、...
 三、...



けいのかみ
 一、...
 二、...
 三、...



一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

けいのかみ
 一、...
 二、...
 三、...



けいのかみ
 一、...
 二、...
 三、...



此の巻は、
 昔の物語を
 今の人に
 知らせる
 ためにつ
 けられた
 ものである
 ことであ
 り、その
 中に、
 多くの
 名人が
 活躍し
 ている
 ことを見
 られる。

ねむいねむい
 夢の国
 へようこそ
 いらっしゃいませ



仕度あり
 玉村艶助




此の巻は、
 昔の物語を
 今の人に
 知らせる
 ためにつ
 けられた
 ものである
 ことであ
 り、その
 中に、
 多くの
 名人が
 活躍し
 ている
 ことを見
 られる。

ねむいねむい
 夢の国
 へようこそ
 いらっしゃいませ



仕度あり
 玉村艶助




けいせいの入心術
 一、入心術の要領
 二、入心術の心得
 三、入心術の注意
 四、入心術の禁忌
 五、入心術の修業
 六、入心術の心得
 七、入心術の注意
 八、入心術の禁忌
 九、入心術の修業
 十、入心術の心得



一、入心術の要領
 二、入心術の心得
 三、入心術の注意
 四、入心術の禁忌
 五、入心術の修業
 六、入心術の心得
 七、入心術の注意
 八、入心術の禁忌
 九、入心術の修業
 十、入心術の心得



今月廿七日...
 松本...
 一合...



今月廿七日...
 松本...
 一合...



三日月の夜に
 月影を照らす
 竹の葉の音
 風の吹く声
 遠くを渡る
 舟の音
 水の流れ
 空の青さ
 雲の白さ
 花の匂い
 鳥の囀り
 虫の鳴き
 人の声
 心の中
 静かなる
 夜

新編
 友田吉太郎
 おげき
 吉太郎
 友田吉太郎




三日月の夜に
 月影を照らす
 竹の葉の音
 風の吹く声
 遠くを渡る
 舟の音
 水の流れ
 空の青さ
 雲の白さ
 花の匂い
 鳥の囀り
 虫の鳴き
 人の声
 心の中
 静かなる
 夜

伊夜
 おひね
 友田吉太郎




はなもあつらふく
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

はなもあつらふく
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

あつらふく
 けいやくとんりやうに

ばまのハツのちのた
 ちまはちのちのち
 はまのちのちのち
 いけのちのちのち
 ちのちのちのち
 はまのちのちのち
 いけのちのちのち
 ちのちのちのち
 はまのちのちのち
 いけのちのちのち
 ちのちのちのち
 はまのちのちのち
 いけのちのちのち
 ちのちのちのち

雷 響 奏 鳴
 あくで
 うりの
 新ク身
 まり
 けり
 新葉集




嗚呼庶のうま

このころの頃の強月うまの書家山下の
純義去脚あふんて道楽あふんて

この書は元祿六年夏五月の開板にして、はじめは芝居百人一首と題號し、
が、賤しき河原者をやんことなき小倉の撰に擬してもものせるよし、尤憚あるよ
し時の書物奉行脇部甚太夫より沙汰ありければ、四場居色競ご改題したり、此
書に序跋もまた發開の年號を記さるるにても、もごありけむを、此ゆるゑに削り
たるなるべし、されごなほ体裁をかへざりければにや、更に町奉行能勢出雲守
より發賣を禁ぜられし、梓主平兵衛といへるは輕追放に處せられぬ、かくて製
本僅に數十部に滿ずして世に稀有の冊子にてありき、亡友豊芥子さしも奇冊
珍本の秘藏多かりし人ながら、此書ばかりはその名を聞くのみなりごかたら
れき、おのれも年頃いかで見まほしかりしを、明治十年の頃、これも今はなき友
なる元木魁望子が秘藏さるよし、ゆくりなく聞いて、漸くにしておのがもの
ごはなりぬるを、こたび文珠庵紫香君の、強てごいはれつるに、いなみがたうて
終に望みたまふにまかせ參らしつ。

明治十七年甲申菊月

かくいふもごの持ぬし

關 根 只 誠

340
30

發行所 演藝珍書刊行會
東京市京橋區榮地三丁目十五番地
電話京橋三〇二二番

製權許不
大正三年四月廿五日印刷
大正三年四月三十日發行
〔賞借金參圓〕
東京市京橋區榮地三丁目十五番地
發行所 川上邦基
東京市京橋區榮地三丁目三十四番地
印刷人 岸山芳太郎
東京市京橋區榮地三丁目十五番地
印刷所 大道社



85-11

63

終